

『八右衛門とその時代』の問題点

会津屋八右衛門の物語は、藩の廻船御用をしていた父清助が名前の無い巨船（大阪で「あほう丸」と呼ばれた）をつくり難破して漂流していたのをオランダ船に救われそのまま赤道を超えた東南アジアの国々をめぐる帰国する前段と、八右衛門がその話を聞き浜田藩の窮乏を救うためその東南アジアの国々に貿易の航海を行う後段に分かれている。『浜田町史』（1935 大島幾太郎）で紹介され世に知られるようになった。

『八右衛門とその時代』（2002 年浜田市教育委員会、以下『その時代』）はこの時点で収集しうるほとんどの文献資料を網羅し、八右衛門の実像に迫ろうとしたもので、文献考証という点で八右衛門研究に関しては今後もこれ以上の物は出ないのではなかろうか。ただ同書の中で「物語によって歴史が曲げられることもある」として具体的には、1, 八右衛門の父清助の漂流話はなかったと思う。2, 八右衛門の南洋貿易はなかったかもしれない。と述べ、いずれも断定的ではないが清助、八右衛門親子二代の冒険譚という物語には疑問を呈し否定的な見方になっている。

1, 2 は八右衛門の物語の核心部分であり、先祖が八右衛門の恩恵を受けた地元松原に住むものとしてそれは看過できないので、『その時代』『浜田町史』『八右衛門口説き唄』他の資料をもとに反論を試みる

1, 『その時代』の中で筆者は八右衛門の父清助の漂流話はなかったと思う理由として次の三点をあげている。

- ① 他にも似た話がある。岡山県和気郡日生町の田淵屋甚九郎は「あほう丸」と呼ばれた千石船で五島列島、朝鮮、中国、ルソン、蝦夷松前へ行ったという
- ② 清助の漂流物語がはじめて世にでたのは弘化2年（1845）浜田藩国学者足立清隆の「鶏肋集」であるというのが松平周防家、松平右近将監家の記録に足立清隆なる人物は見いだせない。
- ③ オランダ船に救助されたことについてオランダ大使館、日蘭学会に問い合わせたがそのような記録は存在しないとの返事であった。

反論

- ① 調べたところこれは清助の時代より約100年前の話である。大阪で「あほう丸」と呼ばれたことについて『浜田町史』の原文「」に（昔聞いた）と入れれば説明がつく。
「あんたみやはったかどてつもないう船がおますが。それがけったいな船の名がおまへん」
「さいだすかそりや（昔聞いた）あほう丸や」（「せや、せや あほう丸や」）

② 鎖国を国是としている江戸時代、清助の漂流譚などとても表立って言えるものではない。筆者もまたお咎めを受けるのである。そのような状況で本名を明かすであろうか。偽名を使うほうが当然ではないのか。記録に名前がないのは当たり前である。

③ 当時海難事故は結構あったはずだが、漂流民を救助した記録はあまりない。なぜか、一旦救助された漂流民は（アジア人であれば）船の労働力として使われ果ては奴隷として売り飛ばされ船長の小遣いにされたからである。高杉晋作が上海渡航の折、現地の人が英国人に奴隷として売られるのを見て憤慨した話は有名である。船には航海日誌の記帳が義務付けられているが、都合の悪いことは書かないのである。調査というなら先ずその期間航海していた船の中から該当する船を特定し、その船の航海日誌を丹念に調べる必要がある。オランダ大使館、日蘭学会がそこまでしたとは思えないし、調べていたとしても上記の理由で航海日誌に書いていない場合もあり、見つけるのはそもそも不可能である。

以上『その時代』でいう「清助の漂流話はなかったと思う」という三点はいずれも根拠にはなっていない。私は逆に「清助の漂流話は本当であったと思う」のである。それは清助の話の中にある「北風温くて南風寒いところがある」という箇所である。これは体験した当事者でないと語ることができないのではないかと思うからである。その話をしたとき誰も信じる者はいなかったという。もし清助が行方不明の間にどこかで聞いた与太話をつないで漂流話を作ったとして、「北風温くて南風寒いところがある」と聞いても清助は信じることはできなかったであろう、まして話の中に入れることなどなかったはずである。

2, 八右衛門の南洋貿易について

『その時代』では八右衛門の竹島(鬱陵島)事件供述書である東京大学附属図書館蔵『竹島渡海一件記全』を発見し、これを第一級の資料として持論を展開し、当該資料の中には南洋貿易について一言も触れていないことについてその理由として小さな字で(政治的理由によるものか、確証がつかめなかったのか、実際に何もなかったのか・・・)としている。さらに「抜け荷船交易の可能性」の項で「東南アジアまで行ったとは思えない」と述べている。

本来第一級の歴史的資料とはその当該事件にかかわりのない第三者による客観的観察によるものでなければならない。この供述書は当事者の八右衛門が浜田藩を守ろうとしておこなった渾身の作り話といえよう。その中では竹島(鬱陵島渡航)のことを詳しく述べ、南洋貿易については一切触れていない。当然である。この資料を第一級の資料とするところにすでに『その時代』の筆者は文献考証学の落とし穴にはまってしまったものと思える。物語に真実は含まれていないのか、資料がなければ事実もないのかということである。またその確認された事実も見方により全く違う結論になりうるのである。

八右衛門の海外渡航は『その時代』中『竹島渡海一件記全』によると竹島(鬱陵島)密貿易は一回のみであるが他の資料には竹島(鬱陵島)密貿易は三回とあったので複数回と考えられると述べている(この時点で八右衛門が嘘を言っていることになり『竹島渡海一件記全』は第一級の資料ではなくなっていることに『その時代』の筆者は気づいていない)

さて当時の藩の状況であるが『その時代』には江戸で老中をしていた浜田藩主松平康任のライバルであった水野忠邦は老中昇進運動のため文政10年と11年に国元から二千八百両ずつ(合計五千六百両)送り、また西の丸老中時代には七千両を捻出した。浜田藩にても同じような状態であって財政はひっ迫していたとある。

『その時代』では八右衛門の活躍期間は天保3年(1832)に船(神東丸)が完成し翌天保4年6月に浜田を出帆してから天保7年3月上旬に浜田で捕縛されるまでの3年八か月であるが『中根家文書』で竹島(鬱陵島)渡航での浜田藩への上納金は1回300両とある。では一体1回300両の上納金でわずかの期間内(3年八か月)に何回航海すれば、江戸に送金し、藩の経済を立て直し、領民を飢饉から救いうるだけの利益が得られるというのであろうか?朝鮮とちまちま貿易をしたくらいで可能であるとは誰も思わないであろう。「八右衛門による南洋貿易」を否定するのであれば、他にどのようにして八右衛門がそのような巨利を得ることができたかきちんと説明すべきである。残った資料は限定的であり、そもそも密貿易の文献資料など残すはずはない。徹底して隠ぺいされたはずである。後年の我々がそれを探し出す事など不可能に近い。

結論として『その時代』で確認出来る資料は限定的であり八右衛門南洋渡航説を否定するには不十分である。

『浜田町史』の著者大島幾太郎氏は戦前戦中に活躍した教育者であり郷土史の大家である。『浜田町史』は603ページに及び縄文時代から昭和まで記述は幅広くまた詳細を極めていいる。浜田町の依頼を受け調査開始から完成まで十年かかっている大作でこれを歴史作家の司馬遼太郎氏も絶賛している。会津屋八右衛門の物語は大島幾太郎の創作ではない。明治の中ごろまでは実際に八右衛門の時代を生きた人々も多くいた。それらの証言を基にし、また南洋貿易の遺物の調査も行っている。

会津屋か今津屋か

『浜田町史』では「清助の代に今津屋が9軒になり迷うので会津屋と改名した。しかしだれも新しい名では呼ばず今津屋で通ったが他国では会津屋、会清でも通った」とあり、このことについて『その時代』では(各地に残る客船帳などから)「今津屋」が正しいのであって会津屋の名前は会津屋か今津屋か?そもそもこれは屋号であって名字ではない。『浜田町史』に清助の代に改名した。とあるのを疑う必要はあるまい。改名したなら以降は「会津屋」でよかろう地元の人々の中に「会津屋」として記憶が残っていればこそ、その「会津屋」という呼び名が受け入れられ、今に引き継がれているのである。

以上断片的な資料によって会津屋八右衛門の南洋貿易をなかったもののように矮小化し、それを前提として『八右衛門とその時代』および『ふるさとの50人』で教育委員会があたかも事実のように取り上げて公式見解のようにしていることはいかがであろうか、会津屋八右衛門200年を迎えるにあたり文献のみではなく大島氏が調査した遺物などを含め真摯な再調査が必要と考える。